



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

チュニジア政変の契機となった抗議のための焼身自殺をめぐる論争： 研究員 河井 明夫

中東の盟主エジプトの体制を揺るがせ、ヨルダンやイエメンなどアラブ各国に飛び火したアラブ大衆の怒りは、チュニジアの青年による焼身自殺がきっかけとなって広まった。この青年、ムハンマド・ブーアジージーの行為が強権的なベン・アリ長期政権に終止符を打ったことに刺激されて、エジプトやアルジェリア、モーリタニア、イエメンでも経済苦などへの抗議の意思表示として焼身自殺を図る若者が相次いだ。直近では2月1日、モロッコの中部で行商人と7歳ぐらいの男児が物価高に抗議して焼身自殺を図ったほか、首都ラバトでも4人の臨時教員が正式採用を求めて教育省の前で自分たちの体に火をつけたと伝えられた。

そもそもイスラムでは自殺は固く禁じられている。また、イスラムでは来世の罰は地獄（火獄）の炎で身を焼かれることとなっており、遺体を火葬にしない。さらにイスラム教徒が信じるのが義務付けられている六信の一つに「神の予定（カダル）」という考えがある。それによれば、人間の死の時と方法は神が決定（予定）するものであり、自殺はそうした神の行為を人間が取って代わって行うことを可能にするような許されざるべき行為となる。焼身自殺現象をめぐりアラブ世界では、①自殺は絶対的に許されない、②チュニジアのブーアジージーの焼身自殺が政変という「好ましい結果」をもたらしたとしてその行為をいわば「容認」する、二つの意見がぶつかりあい、さらに他にも様々な議論が展開されている。

①自殺を禁忌（ハラーム）とみなす意見

エジプトにあるスンナ派の権威、アズハル機構は1月18日、抗議や怒りの意思表示であれ、どんな状況であろうとイスラムが自殺を禁じていることを確認した。また、サウジ宗教界のトップであるアブドルアジーズ・アールツシェイフ最高法官（グランド・ムフティー）も21日の金曜礼拝の説教の中で、自殺という手段に訴えること、また圧力をかけ要求を実現させるための手段として自殺を容認することを厳しく非難した。アールツシェイフは、如何なる状況にあっても、たとえ仕事や商売、学業で失敗したとしても、イスラム教徒が自殺という行為に及ぶことは許されないという立場をとっている。その他の宗教学者も、預言者ムハンマドが自殺した者のために礼拝を行わなかった事例などを持ち出して、自殺が禁忌であることを強調した。また、これら宗教学者によると、イスラムでは、自殺は神が定めた運命に対する不満、そして神が与えた試練に耐えられないことを意味するという。

②自殺容認派の意見

一方、その発言が全世界のスナ派に影響を持つカタール在住の宗教学者、ユースフ・カラダーウィー（エジプト出身）は、チュニジアのブーアジージーの焼身自殺は、抑圧を感じ取った結果によるものであるとした上で、ブーアジージーに始まりアラブ各国で若者たちを自殺に駆り立てている責任は、各国の指導者の責任であるとの意見を表明した。これは、1月16日放送のカタールの汎アラブ衛星テレビ「アルジャジーラ」の番組の中で、「ブーアジージーが自らの体に火をつけたことは、圧制者に対するジハードの例外的な手段か、或いは単なる自殺か」という視聴者からの質問に対する発言であった。そしてカラダーウィーは、ブーアジージーがウンマ（イスラム共同体）にとって善をなし、チュニジアを救い、この「革命」に火をつけたことを理由に、神がブーアジージーを赦すよう願うことをイスラム教徒に呼びかけた。

このアルジャジーラでの発言がイスラム教徒の間で波紋を引き起こしたことを受けて、カラダーウィーは放送からの数日後（19日）、声明を発表した。この中でカラダーウィーは自分の発言が一部、誤解されているとしながらも、全体的にブーアジージーの行為を称える論陣を張った。そして、ブーアジージーが生計を立てていた路上行商を警察に止められて激昂し、自制不能の状態に陥っていた点に注目し、イスラム法的な解釈に踏み込んでいる。カラダーウィーは、こうした状態では自由意思は働かなかったとして、ブーアジージーの責任能力を問えないと主張した。しかし、それと同時に、アラブ・イスラム世界の若者たちに対して、現在の状況に怒り、未来に絶望して、自らに火をつけることをしないよう呼びかけた上で、むしろ焼かれるべきは圧制者たちの方であると、アラブ各国の政権を厳しく非難した。

③ブーアジージーとそれ以外を区別する意見

アズハル機構のイスラム研究アカデミーのメンバー、アブドルムアティー・バユミーも、ブーアジージーのケースは怒りのあまり意識と理性を失った状態であったとして、ブーアジージーのためにイスラム教徒が神の赦しを願うことは構わないという意見を述べた。しかし、ブーアジージーの後に続発した焼身自殺については、自由意思に基づくものだとして、完全な禁止事項であるという判断を下している。ブーアジージーに倣おうとエジプトなどで焼身自殺した者たちは、政変や変革を引き起こすことを意図していたが、バユミーは、それは自殺以外の他の手段によってなされるべきであると主張した。

④インターネット上の論争

こうしたイスラム法学者による論争以外にもインターネット上では一般のイスラム教徒の間で同様の論争が繰り広げられている。ネット上のある掲示板ではブーアジージーを殉教

者（神のために落命した者）とみなすかどうかという議論がなされた。ある投稿者は、抗議と変革の手段は自殺以外にも数多くあるとし、抗議活動中に軍隊の発砲で死んだのであれば、それは殉教者であるという例を示しながら、ブーアジージーは殉教者ではないと主張した。また、別の掲示板では、ブーアジージーは自らの命を犠牲にしてチュニジア国民だけではなく、ウンマの気持ちを表現し、アラブの圧制者たちとそれを支援する欧米の指導者たちに警告のメッセージを送ったのだとして、彼を英雄、殉教者と称える書き込みもあった。サウジ資本の汎アラブ紙「アッシュアルクルアウサト」によると、更に踏み込んで、イスラム諸国の若者たちに、圧制に対するジハードの一種として自らの体を焼き、それぞれの国の指導者たちに背くよう呼びかける過激な意見も書き込まれていたという。

◎本「かわら版」の許可なき複製、転送、引用はご遠慮ください。
ご質問・お問合せ先 財団法人中東調査会 TEL:03-3371-5798、FAX:03-3371-5799